

ジェイン・オースティンの『マンズフィールド・パーク』  
をめぐるポストコロニアル論争について

有 田 亘\*

**The Post-colonial Dispute about Jane Austen's  
*Mansfield Park***

Wataru Arita\*

**Abstract**

Edward W. Said's *Culture and Imperialism* stirred up a post-colonial dispute about the novel, *Mansfield Park*, written by Jane Austen.

But Said's point in question was to interpret the "structure of attitude and reference" of Austen from a viewpoint of the criticism of colonialism from within a colonial realm. I would like to show that it was what he captured by "contrapuntal reading" of Austen's interpretation in *The Country and the City*, Raymond Williams presented.

If it was Williams in *The Country and the City* who drew out the criticism of the class society from within the class society of Austen via a viewpoint of the class Austen could not hold but Williams could, it could be interpreted that Said in *Culture and Imperialism* drew out the criticism of colonialism from within the colonialism society of Austen via a post-colonial viewpoint we can hold but Austen and Williams could not.

**キーワード**

植民地主義、帝国主義、ポストコロニアル理論、ヒューマニズム、構造

**1 ポストコロニアル理論の、サイドを介したオースティン解釈**

ジェイン・オースティンの『マンズフィールド・パーク』(1814)は、控え目でおとなしい主人公ファニー・プライスが伯父のサー・トーマス・バートラムのもとに引き取られ、そこでの人間関係に翻弄されながらも最終的には次男のエドモンドと結婚し、その荘園マンズフィールド・パークの女主人となるまでの物語である。それはオースティンの他の小

---

\*ありた わたる：大阪国際大学人間科学部講師〈2009.12.24受理〉

説同様、もっぱらヴィクトリア朝時代イングランドの農村紳士階級の社会を描いている。だがそこには、当時大英帝国の植民地であった西インド諸島アンティグアのことも、わずか（二か所ほど）ではあるが顔を出す。

その一つは、サー・トーマスとその島に所有している砂糖プランテーションの管理のため家を留守にするというエピソードである。監督者がいない間、パートラム家の（ファニーとエドモンドを除く）若い男女たちは放蕩の限りを尽し、家庭内の秩序は地に墮ちる。だが予想外に早く現地での仕事に目途をつけたらしいサー・トーマスが突然帰宅すると、屋敷の平穏は見事なまでに素早く、そして完全に回復する。[Austen (1814): I-3=1978: 28-29]。

ポストコロニアル理論の研究者たちの主張によれば、帝国主義時代に書かれたイギリス小説が「内面を省察する作品で、秘教的あるいは非政治的なのだとされているとしても、必ず植民地主義という独特のリズムである傾向を与えられているはずである。」[Loomba 1998=2001: 111] いま挙げた『マンスフィールド・パーク』のエピソードも、その作品に与えられている「傾向」の現れとして読み解くことができる。すなわち、サー・トーマス・パートラムの地所は、いかにもイングランドらしい田舎の風景の中の安全な場所のように描かれている。しかしこの風景を支えているのは、奴隷労働を用いて経営されていた、西インド諸島アンティグアの砂糖プランテーションなのだ、というわけである [Boehmer 1995: 25]。

こうしたポストコロニアルな解釈をオースティンに持ち込んだのは、エドワード・W・サイードだとされる。『文化と帝国主義』の一章として収録された「ジェイン・オースティンと帝国」の中で彼は次のように主張し反響を呼んだ。「オースティンに従えば、われわれはイギリスの土地（たとえばマンスフィールド・パーク）がどんなに孤立し隔離されていようと、海外からの支援を要するのだと結論することになる。サー・トーマスのカリブの財産は奴隷労働によって維持される砂糖プランテーションでなければならなかったはずである。」[Said 1993: 89=1998: 176]

『文化と帝国主義』の書評者はほとんど例外なくこの議論に焦点を当てた。たとえばジョン・レナードは『ネイション』にこう書いている。「マンスフィールド・パークの均衡と秩序の上にジェインが据わっているのを見よ。調和的な「社会空間」、つまりサー・トーマス・パートラムの田舎の地所が奴隷労働によって維持されているという事実について、彼女のか弱い頭はそれほど悩まされることはないのだ。」[Leonard 1993: 383] またマイケル・ゴラによる『ニューヨークタイムズ・ブック・レビュー』の書評は、そのタイトルからして「誰がマンスフィールド・パークの勘定を払っていたのか？」と問いかけるものであった [Gorra 1993: 11]。

『エドワード・サイード・リーダー』でそれらを概観したムスターファ・バユウミとアンドリュー・ルービンは、サイードの議論が「レイモンド・ウィリアムズが『田舎と都会』で示した影響力のあるジェイン・オースティン読解に対する応答」であるということをしきりに紹介している。ウィリアムズのその読解は、マルクス主義的な観点からオースティンの小説に隠された階級的構造を批判したものであるとして知られている。だが1973年に書かれた

その著作には、1980年代後半以降思想界に台頭してくるポストコロニアルな視点にはまだ欠けている。つまり、「ウィリアムズは、オースティンの小説に出てくる清廉に仕立て上げられた田舎の荘園が依存している植民地的基盤を見逃したが、サイドは『マンスフィールド・パーク』を、それが言及しているが隠蔽してもいる植民地主義という地理的・歴史的状况の中に置き直しているのである。」[Bayoumi & Rubin 2000: 347]

だがオースティンを植民地主義という状況に「置き直す (restore)」といっても、バユウミとルービンも含めてポストコロニアル理論は、結局のところサイドの主張を、ウィリアムズが見逃したオースティンの隠れた植民地主義を“正しく批判する”ものとして評価しているようである。それではオースティンがアンティグアに言及したもう一か所のニュアンスを十分に捉えることはできないだろう。

それは、あるとき西インド諸島の土産話をしていたサー・トーマスにファニーが奴隷貿易について尋ねてみた、というエピソードである。するとその場の誰もが、あちらの世界とこちらの世界では単に共通の言語がないのだから両者は結びつけようがないのだと言わんばかりに、「しんと黙り込んでしまった (dead silence)」という。[Austen (1814): II-3=1978: 168]

これはなごやかな団らんの場に奴隷制などという不穏当な話題が持ち出されたことで生じた気まずい沈黙なのではない。「みんながもっと尋ねてくれていたら、父も喜んだことだろうに」とエドモンドが後で言っていることから、その話題はタブーというわけではなく、単にその場の人たちの興味をひかないものだったことがわかる。また彼が残念がっているのも、ただみんなの関心を得られなかったからにすぎない。奴隷問題に鈍感な人々を道義的に責めるような様子はいかかわれない。

そうしたその場の雰囲気と、そこに現われているオースティンの価値観を、サイドは「奴隷制の残酷さとそぐわない (at odds)」と評している。奴隷制のことを口にするのも憚るような沈黙なら、まだしもその残酷さにそぐうところがある。だが実際に生じているのは単なる無関心とでも言うべき、「あちらの世界とこちらの世界では単に共通の言語がないのだから両者は結びつけようがないのだと言わんばかり」の沈黙なのである。「ここに私 [サイド] に感銘を与えたがどうにも解決できない、ジェイン・オースティンを読む際のパラドックスがある。」[Said 1993: 95-96=1998: 187]

そして、ファニーの思いがけない質問にパートラム家の人々が見せたのと同種の保守的な当惑が、ポストコロニアルな解釈に対して発せられている。作中にわずかばかりの言及しかないアンティグアのことを殊更に強調するのは牽強附会であり、行き過ぎた誤読ではないか、というわけである。サイドのエッセイは小説家としてのオースティンの地位・文学的価値を貶めるものだとするアーヴィン・ハウ [Howe 1993: 557-559] や、「誰がアンティグアのことなど気にするものか? などと誰が言った?」と反発する高橋和久 [高橋 1995: 212-221] の議論がそれに当たる。またジョン・サザーランドは次のような穿った解釈を皮肉っぽく提示してみせた。——アンティグア以上に些細な言及しかされていない事柄であるが、ファニーは福音主義キリスト教クラバム派の信者だった。クラバム派は、当時英国内で起こったウィルバーフォースの奴隷制廃止運動に宗教的見地から共闘したこ

とで知られる。したがってファニーがマンズフィールド・パークの女主人になるその小説の結末は、植民地主義的な奴隷制がやがては打破されることを暗示しているのである。[Sutherland 1996=1998: 10-11]

ポストコロニアル理論は、言及されないことこそが植民地主義を「抑圧」している証拠である、という「おなじみの批評的手段」[Sutherland 1996=1998: 6]によってそれらの抵抗を一蹴したが、議論は噛み合っていない。当然、言及がないというだけでは抑圧がある証拠にもならなければ、抑圧がない証拠にもならないからである。ただこの不毛な対立を通して見てとれることがある。それは、オースティンと植民地主義が「そぐわない」と考える点では、ポストコロニアル理論も、またそれを非難する保守派も、実は共通の基盤に立っている、ということである。だから前者はオースティンが植民地主義者であることを問題視し、後者はオースティンを植民地主義者であると見なすことを問題視するのである。

だとすれば、むしろここで問われるべきは、そぐわないはずのものがなぜ居心地よく (at home) 共存できるのか、ということではないだろうか。実際、『文化と帝国主義』の重要な主題の一つ、「姿勢と言及の構造 (structure of attitude and reference)」についての議論はその問いによって構成されている。反植民地主義をうたうリベラルでヒューマンスティックな思想の中にこそ現れる帝国主義的な姿勢、つまり言及されるはずのものがなぜか言及されないということ、そしてそれはほとんどすべての西洋思想に見出される構造的な特徴であるということ、サイドは随所で執拗なまでに反復している。そこにはサイド自身ある面では深い共感を寄せているような洞察に富んだ思想すらも含まれる。オリエンタリズム (ドラクロワのような偉大な画家からフローベールのような大作家まで) は言うに及ばず、デイドロやモンテスキューなどの啓蒙主義、ウィルバーフォースの奴隷制廃止運動、J.S. ミルの功利主義哲学、そしてマルクス主義——マルクス自身から、反帝国主義論者の V.G. カーナンや J.A. ホブソンに至るまで。もちろん、レイモンド・ウィリアムズもそこに名を連ねることになる。「だから、われわれはこう問うてもよい。このヒューマンイズム思想の総体と帝国主義とはいかにしてそんなに居心地よく共存できたのか、そして本国での帝国に対する目立った対立や抑止が——帝国の領土の中で、帝国主義に対する現地人の抵抗が拡大するまで——ほとんどなかったのはなぜなのか、と。」[Said 1993: 82= 1998: 164]

そしてこの問いは、『田舎と都会』の中でウィリアムズがオースティンに対して発したのと同じ形のものである。「[オースティンは] 鋭い観察力を発揮したが、その観察を制約していた条件や圧力は何だったのか、またあの個人的・道徳的側面に力点を置いた精密で探索的な描写の社会的内容とは何であったのか?」[Williams (1973): 113=1985: 156] ここでウィリアムズは、社会を批判的に観察することにかけては抜きん出ているオースティンの鋭敏な才能が、階級社会の批判に関してはまったく発揮されず、かえって保守的な道徳ばかりが断固肯定的に語られるという、そぐわないはずのものの居心地よい共存に照準している。したがって本稿の目的は、サイドを介したポストコロニアル理論のオースティン解釈に、ウィリアムズを介したサイドのオースティン解釈を対置することにあ

る。

だがその際、オースティンには立ちえなかったが自分には立ちえた階級的視点を語るウィリアムズが、ポストコロニアル理論家ならば立ちうる反植民地主義的な視点を欠いていることに触れないわけにはいかない。そぐわないはずのものの居心地良い共存はウィリアムズ自身にも見出されるのである。したがってウィリアムズの「感情の構造 (structure of feeling)」を念頭に置いた概念である「姿勢と言及の構造」[Said 1993: 52=1998: 113]を浮かび上がらせるために、オースティンを植民地主義的状况に「置き直す」サイドの作業は、彼が「対位法的読解 (contrapuntal reading)」と呼ぶ手法によってなされていることになる。つまり、「ウィリアムズの導きに従って」[Said 1993: 83=1998: 166] サイドが引き出しているオースティン解釈は、それにもかかわらずウィリアムズとは「非継承的關係 (affiliation)」を取り結んでいるのである。

オースティンには立ちえなかったがウィリアムズには立ちえた階級的視点を介して、オースティンの階級社会内部での階級社会批判を引き出したのが『田舎と都会』におけるウィリアムズだったとすれば、オースティンやウィリアムズには立ちえなかったが、現代のわれわれなら立つことのできるポストコロニアルな視点を介して、オースティンの植民地主義社会内部での植民地主義批判を引き出しているのが『文化と帝国主義』のサイドだと言えるだろう。

そこで模索されているのは、ポストコロニアル理論が想定しているような反植民地主義的なオースティン批判でもなければ、保守的な立場からオースティンの植民地主義を擁護するのでもない、第三の方向性である。すなわち、オースティンの植民地主義的な視点からこそ真に有効な植民地主義批判を行うことができる、というものである。そしてそれこそが、帝国主義 (近代西洋植民地主義) を批判的に乗り越える「人間科学のための非強制的モデル」[Said 2001: 187=2007: 342] を構想するサイドの理論的核心部分であると本稿は考えている。

## 2 ウィリアムズの、(階級理論を介した) オースティン解釈

ウィリアムズは『田舎と都会』の第11章で、およそ次のような議論を行なっている。——ジェイン・オースティンとウィリアム・コベットという二人の作家は同じ18世紀末から19世紀初頭にかけての同じ時代をファーンナム周辺という同一地域内で生き、共に非常に精密な分析的観察力を発揮して、自分たちの暮らす身近な人間社会を描き出したことで知られる。だがそこまで共通していながら、コベットの『農村騎馬行』(1830)には階級的視点の意識があるのに、彼が旅の通りすがりに見たような屋敷 (カントリー・ハウス) からほとんど外出することもなく小説を書いていたオースティンには、そうした意識が欠けているように見える。彼女は農村紳士階級の世界で幸せをつかむ主人公たちへ辛辣な批判的まなざしを向けるとはいえ、突き詰めればその道徳的な正しさを断固肯定的に語るからである。階級性は、同時代の同郷人コベットや、あるいはオースティンに続く世代の作家たち (コールリッジ、G. エリオット、M. アーノルドなど) が否応なしに見てとることになっ

たものなのだが、彼らに勝るとも劣らない鋭敏な観察力を持っていたはずのオースティンだけはそれに関心を示さず、またそれゆえ彼らと同じ地点へ到達することもなかった。

この「オースティンのパラドックス」[Williams (1973): 115=1985: 159] を批判的に指摘しつつ、だがウィリアムズはこうも述べている。「とはいえ、オースティンの主張したものは、あの屋敷の周囲にめぐらせた塀の外へ、別種の社会体験の中へ連れ出してやりさえすれば道徳批判ではなく社会批判に十分なりうるものだった。」[Williams (1973): 117=1985: 161] つまり同じ社会を同じように観察・描写したものであっても、それがその社会の外側から行なわれればコベットのような階級社会批判になるものが、内側から行なわれればオースティンの作風に現われるような保守的な道徳になる、というわけである。

「改良 (improvement)」という観念がそこに作用していることを、ウィリアムズは次のように指摘する。

騎馬行の途中、[コベットは]諸々の階級のことを口にする。[それに対して]、ジェイン・オースティンが屋敷の内側からそれら階級を眺めることはけっしてありえない。たとえ彼女の社会的描写がいかに複雑であろうとも。彼女の分別はすべて内向的で排他的なものである。彼女に関心があるのは、複雑な改良を積み重ねながらある階級に入り込もうとしている人々の振る舞いである。しかし唯一の階級しか見出されないところには、複数の階級は見出されるべくもない。[Williams (1973): 117=1985: 161]

ウィリアムズによれば、improve の意味には経済的に「良い収益を上げる」というものと、社会的・道徳的に「より良く(向上・改善)する」というものの二つがある。エンクロージャーを(「土地改良」のためとして)正当化する経済的な意味が初期の用法であったが、18世紀以降は両者を特に区別せず、何かを「より良く改める」という広い意味で使われることが多くなっていた。だがオースティンは経済的な意味での改良に言及しない。彼女の小説はあくまでも、改良とは社会・道徳的に向上・改善することであり、またそうあるべきだという「定則」にのっとっているという [Williams (1973): 116=1985: 160; (1976)=2002: 156-157]。

これは、オースティンには社会の経済的な面が見えていないということではない。それどころか彼女の鑑識眼は「財政家のものである」とさえウィリアムズは評している。だが「正確かつ率直」だとされるオースティンの観察力は「極めて特異な面において」発揮される。彼女の目は家屋敷に対してはその細部にまで吸い寄せられるが、それが建っている土地そのものにはそれほどの注意が払われないのである。「土地はまず年取と地位を象徴する指標として眺められる。土地の所産として重視されるのは、土地が整然と管理されているかどうかということであって、土地に加えられる労働の過程はまったく視野に入らない。」というのも、「金は視覚的等価物を持たない」からである。「それをはっきり認知するためには、どうしても、家屋敷といった階級を表わす記号に変換してやらねばならない。これは著しく象徴的な見方である。」[Williams (1973): 115=1985: 159]

あるいは、オースティンは消費という面から紳士階級の経済を見ていたと言えるのかも

しれない。一方コベットは、生産とその現場である土地をまずもって見据えるがゆえに、「私はかねてから、豊かな土地には貧しい労働者がつきものである、という見方をしている」と語る。そのとき彼が明るみに出すことになったのは、「改良」の二つの意味が実は矛盾し合っているということである。生産が増え収益が豊かになっても、人々の生活が豊かになるとはかぎらない。つまり改良は向上・改善ではない。この認識は19世紀後半以降、一般的なものとして定着するようになる。オースティンの依拠していた「定則」も崩壊へと導かれ、それと同時に「改良」の用法も変化し、二つの意味は区別して使われるようになった〔Williams (1973): 117=1985: 161; (1976)=2002: 157〕。

だがその区別を語るには、19世紀前半までの経済的なものと道徳的なものを分けない用法のままでは不自然さが残る。コベット自身、葛藤に悩みながらも最終的な決断として労働者たちの側につくことを表明するものの、自分の言い方は「〔農場主階級の〕多くの人たちにしかるべき敬意を払うことなしにやたらと激しく鞭を加えた」ものではないかと反省したりもしている〔Williams (1973): 111=1985: 154〕。しかしウィリアムズに言わせれば、その言葉遣いはオースティンの上品で繊細な文体とは対照的に粗野でごちない。その点では彼の社会批判は、「確固として出来上がっている世界への確信そのものが、不穏な、攻撃的な、対立的な意見に屈した」結果得られたものなのである〔Williams (1973): 117=1985: 162〕。

コベットの問題意識は、改良の二つの意味を区別しない社会では十分に視覚化されえないとも言える。彼の視線はあくまでもその社会の外部のもの、内部とは単に結びつけようのないものに留まるのである。

それに対し、オースティンは屋敷の中の消費的な事柄だけに注目していたおかげで、良い収入をもたらすのは良い行ないであるという「確固として出来上がっている世界への確信」を覆すものに触れることなく、すませることができた。そしてその「定則」に基づいて、良い行ないをしない登場人物たちに向けられるオースティンの皮肉や当てこすりは、改良がもはや向上・改善ではないという主張と実は矛盾していない。『『エマ』、『説き伏せられて』、そして『マンスフィールド・パーク』に起こることと言えば、結局は社会基盤から切り離しうるが、それに歯向かうことすらありうる日常的で妥協を許さぬ道徳の展開である。〕〔Williams (1973): 116=1985: 161〕 こう述べるウィリアムズにとって、オースティンの立場はたしかに屋敷の外側への視線を欠いた差別的なもので、外部とは単に結びつけようのないものに留まる。だがむしろ経済的改良と道徳的改善が区別されない社会の中で、オースティンは「分別 (discrimination)」をもって、道徳的改善と言える部分のみを厳密に選び出していたとも言えるのである。

オースティンの属していた当時の紳士階級社会は、コベットが外側から捉えるような伝統的で固定的な世界というだけでは必ずしもなく、「イギリス社会史の中でも特に説明しにくい」「錯雑たる」〔Williams (1973): 115=1985: 158〕世界だったとされる。そしてその中に渦巻く「社会的混乱と矛盾」こそが、あの「日常的で妥協を許さぬ道徳」を要求することになる、という指摘をウィリアムズは行なっている。「公然と物欲を追求し財の移転にも関与しているこの社会は、伝来の規準と改善の道徳律に則して、自らを判断しようと

努めているのである。」[Williams (1973): 115=1985: 159]

それゆえオースティンは「複雑な改良を積み重ねながらある階級に入り込もうとしている人々の振る舞い」に関心を持っている、というわけである。それは、結局は社会基盤から切り離された道徳が日常的で妥協を許さぬ仕方で通用するような、狭い社会の中からでないと視覚化されない。そのためもちろん、オースティンが道徳的に語ることはコベットののような社会批判とはまだ言えない代物である。だがそうであるからこそ、それは別種の社会体験（階級性の意識）の中へ連れ出してやりさえすれば道徳批判ではなく社会批判に十分なりうることも、ウィリアムズは示そうとするのである。唯一の階級しか見出されないところには、複数の階級は見出されるべくもないという制約を踏まえた上で、道徳批判を社会批判へと転換させねばならない。

ただし、「この転換の難しさ」[Williams (1973): 117=1985: 161] もウィリアムズは意識している。オースティンの体験したようなものを別種の社会体験へと「連れ出す」ことはコベットにはできずに終わった。カントリー・ハウスの内と外には、それだけ大きな断絶が走っているとも言えるのである。

### 3 サイドの、ウィリアムズを介したオースティン解釈

このようにウィリアムズは「錯雑たる社会的混乱と矛盾」の中で人々が「複雑な改良を積み重ねながらある階級に入り込もうと」するとき「日常的で妥協を許さぬ道徳の展開」が生じることを指摘している。だがそうした議論を「一般論においてまったく正しい」、「秀逸である」と高く評価しているサイドに言わせれば、「しかしながら、『マンズフィールド・パーク』に関しては、ウィリアムズの調べたことにより多くのことを付け加え、より大きな明証性と興行きを与える必要がある。」[Said 1993: 84=1998: 167]

前節で字下げして引用しておいた記述 [Williams (1973): 117=1985: 161] は「ジェイン・オースティンと帝国」にも掲げられているものだが [Said 1993: 84=1998: 167]、そこでウィリアムズが「改良」という農村紳士階級の道徳的観念に着目していたのに対し、サイドはそれを「膨張 (expansion)」という帝国主義的観念に置き換えて議論を進めようとする。「そうすればおそらくオースティンは、また帝国主義以前の小説一般は、一見してそうであるのよりもずっと帝国主義的膨張の原理を含んでいるものとして現れてくることだろう。」[Said 1993: 84= 1998: 168]

ここでサイドが参照するのは、帝国主義を「国民性の膨張 (expansion of nationality)」として記述した J.A. ホブソンである。その際ホブソンは、「膨張」の方を「国民性」より重視した方がわかりやすい、という注釈を加え、なぜなら「国民性」は今では十分に形成され決まった大きさ (quantity) になっているが、一世紀前までは国内外ともにそれは「形成途上」にあったからだ、とその理由を説明していた。[Hobson (1902): 6; Said 1993: 83=1998: 166] これは「感情の構造」概念を提唱する際に、抽象化されない現実の現在形で起こっている文化の「形成過程 (formative process)」を重視したウィリアムズと共通の姿勢である。そして「ルカーチとブルースト以後、私たちは小説の筋と構造



を、主に時間によって構築されていると考えることに慣れっこになってしまい、空間や地理や位置の機能を見逃してきた」[Said 1993: 84=1998: 168] と述べるサイドは、時間軸に沿った思考がもはや意味をなさない「現在」という一点に注目するホブソンやウィリアムズの立場をより鮮明に、非時間的な空間的思考に置き換えることを提案していると言えるだろう。

「膨張」は、「改良」がそうであったのと同様に、実質的に異なる二つの意味を含んでいる。時間的次元で捉えるなら、ある社会空間が膨張するということは、その規模が以前より大きくなること——植民地主義的状况に即して言えば、まさに領土拡大という変化——を意味するだろう。しかし空間的・地理的次元から見れば、膨張はその空間の外部が内部に「成ること (becoming)」、あるいは入り込んだり取り込まれたりすることによって引き起こされる位置 (location) や配置 (disposition) の混乱 (dislocations) やその到着 (relocations) を意味する。

カントリー・ハウスの塀の中からは労働者階級の姿が見えなかったように、膨張が現在形で進行する帝国の内部では、その過程は時間的には捉えられず（「大きさ」が十分に形成された事後的には捉えられるだろうが）、空間的な連関としてのみ捉えられるはずである。それゆえサイドは、「オースティンの想像力の働きが、一分の狂いもなく厳密に、地理的・空間的分類と呼べるような様式を駆使して展開する」ものとして『マンスフィールド・パーク』を解釈するのである。

その解釈に適合する事例は、本稿でもすでに述べたサー・トーマスの留守中に起こった事件や、奴隷制の残酷さとそぐわない沈黙のエピソードだけにとどまらない。屋敷に引き取られてきたばかりの10歳のファニーが、おどおどとしてまだ何もわからない状態であることが「ヨーロッパの地図をつなぎ合わせることもできない」エピソードによって暗示される冒頭部から、「ファニーにとって安堵として、次には手助けとして、最後には代理として」屋敷に連れてこられた妹スーザンがファニーの後釜に座するという、全編の凝縮的反復となっている後日譚までもが丁寧に付け加えられている結末部まで、その小説から読み取れるものは一貫している。

それらを通じて「オースティンがわれわれに示そうと腐心するのは、別個に見えながら、その実、一つに収斂してゆく二つのプロセスである。」[Said 1993: 85=1998: 170] すなわち、経済秩序と道徳秩序の維持をめぐる生じる空間的膨張のプロセス。経済秩序のプロセスの方は、バートラム家の家計のために必要な空間がイングランドの屋敷だけでは不十分で、アンティグアの荘園やポーツマスファニーが必然的に重要になっていく経緯を通じて描かれる。道徳秩序のプロセスは、志操堅固なファニーが、数々の挑戦や脅しや不意打ちにめげることなく対処してゆくことで、その存在感や影響力の範囲を広げていくプロセスとして描かれる。

そしてそれらのプロセスが収斂してゆく先は、「継承的關係 (filiation) は、家庭内=国内においてであろうと国外においてであろうと、連続性や上下関係、権威を保証するのに十分ではない」[Said 1993: 85=1998: 168] という論点である。バートラム家にとってファニーは「養子縁組 (affiliation)」によって結ばれたにすぎない部外者である一方で、家族

の何人かは文字通り「廃嫡 (disaffiliation)」の憂き目に会うことが示しているように、あるいはそもそも屋敷に引き取られたときは存在感もまた実際に居場所もないファニーが、やがてはその女主人になるという物語の筋立てからして、『マンスフィールド・パーク』は、「望ましいイギリス的秩序の中心に、見かけたところ自然に反する（あるいは少なくとも反論理的な）原理があることを示し、この原理に祝福を与えているのである。」[Said 1993: 87=1998: 173] すなわち、非継承的關係 (affiliation) という原理に。

そのことを特に鮮やかに描き出しているのは、マンスフィールド・パークの生活に慣れた後で、ファニーがポーツマスに里帰りしたときのエピソードである。もはや彼女は自分の家を「居心地がよい (at home)」とは感じられない。なぜなら、そこが狭すぎるからである。「小さすぎる空間の中では、明確に見ることも考えることもできないし、基本的な種類の調整や注意ができない。適切な気配りも思いやりもあつたものではない。(…)これを矯正するのは、よく管理された広大な空間しかないのだ」[Said 1993: 88=1998: 174] とサイドは解説している。次のオースティンの精密な描写がいきみじくも伝えているように、狭い空間では他人への配慮や礼儀作法は得られるべくもないのである。——「たった一本の蠟燭は父と新聞の間に占領され、彼女の便不便にはいっこうおかまいなしでした。」[Austen (1814): III-7=1978: 332]

しかもサイドは、すかさずこう続ける。「そのような空間がファニーには、直接的な遺産相続によっても、合法的な資格によっても、また近かったとか繋がっていたとか隣接していたとかいうことによっても手に入らなかったというのが、まさしくオースティンの論点である。マンスフィールド・パークにおける権利を得るにはまず、ある種丁稚奉公として、あるいは極端に言えばある種の輸出品として、家=故郷を離れねばならないのだ。」[Said 1993: 88=1998: 175]

これこそ、植民地支配を正当化する帝国主義的「膨張」の理念そのものと言うべきだろう。それが帝国と海外領土の双方にとっての利益・幸福として語られている点に注意したい。「居心地のよさ」は帝国本国だけでは手に入らないが、海外領土の側もその恩恵は植民地化されることによってのみ手にできるのである。だからサイドは「安堵 (comfort)」という居心地のよさは「付加された価値 (added good)」なのだと言っている。「名も知れない外側からの力、いわばアンティグアの富と、ファニー・プライスという輸入品によって逆説的にも与えられた観点によって」初めて気づくものなのだと。[Said 1993: 91=1998: 178] だがその価値は単なる功利的な美德ではなく、道徳的必然であることにも注意したい。なぜなら、そのことに気づくのは、オースティンが言うところの「気質 (disposition)」への配慮を通じてだからである。

登場人物みんなに安堵を「取り戻す (restore)」ためにその小説を締め括るのだとオースティンが書き記している最終章の中で、サー・トーマスは、「“内部 (within)” に何か欠けていたにちがいないのです」ということ、そして「配慮は知力と作法だけに向かい、気質の方にはついぞ向かなかつたのです」ということを悟る。[Austen (1814): III-17=1978: 401, 403] このエピソードが示しているのは、家庭内=国内における諸問題を解決する分類や調整、再配置——つまりは膨張——が「分別」のある仕方の「改良」と

してなされるという、まさにウィリアムズが言うところの「日常的で妥協を許さぬ道徳の展開」[Williams (1973): 116=1985: 161] である。

ここに、「ヒューマニズム思想の総体と帝国主義という、そぐわないはずのものがいかにして居心地よく共存できたのか」というあの問いに対する解答が与えられるだろう。——帝国内部における何らかの欠如は、気質に配慮した膨張によってのみ改良されるからであり、それは道徳的に必然的な唯一の分別ある解決策だからである。「オースティンが小説の最後の一文まで、肯定し反復してやまなかったのは、貿易や生産や消費を含む地理的膨張のプロセスだが、このプロセスこそが道徳を規定し強調し保証するのである。」[Said 1993: 93=1998: 182]

実際サイドは、「西インド諸島との貿易を、対外貿易と考えるのは難しい。むしろそれは都市と田舎の交通に似ている」という J.S. ミルの『政治経済学原理』の一節を引用しつつ、“そぐわないはずのものの居心地よい共存”の必然性を説明している。膨張する帝国の「内部」では、支配や搾取はそれとは認識されず、断固なる道徳の肯定としてのみ認識されるのである。オースティンの小説は、膨張の過程は空間内部の「複雑な動き」としてしか表象されえないことを辛辣に指摘しているものと解釈される。だから、サイドはギャラガーの言葉を借りつつこう結論する。「植民地支配を通して行われているそれが好まれようが嫌われようが、いかなる様式においてもそれが望ましいことは、一般に広く認められていた。そのためつまるところ国内で帝国版図の拡大に歯止めをかけるものは何もなかったのである。」[Gallager 1982: 76, Said 1993: 93=1998: 182]

#### 4 サイドの、ポストコロニアル理論を介したオースティン解釈

「日常的で妥協を許さぬ道徳の展開」が帝国主義的植民地支配をどのように肯定的に正当化するか、帝国内部では支配領域の「膨張」がいかに空間的な管理の問題としてしか認識されえないかを理解させてくれる前節の議論には、付け加えるべき論点が残されている。というのも、その道徳の展開にウィリアムズは、「結局は社会基盤から切り離しうるが、それに歯向かうことすらありうる」という限定条件を付していたからである。そもそも、オースティンの主張したものは「別種の社会体験の中へ連れ出してやりさえすれば、道徳批判ではなく社会批判に十分なりうるものだった」と述べるウィリアムズの議論を、階級批判だけではなく植民地主義批判にも適用することをサイドの議論は目指していた。だとすれば、オースティンとその小説がいかに徹底して植民地主義的であったかを示すサイドの議論は、オースティンとその小説がいかに徹底した植民地主義批判たりえているかも同時に示しているはずである。

実際、サイドは、登場人物たちが「海のむこう (out there)」に言及する時の振る舞いを「気楽 (ease)」で「屈託のない (uninflected)」、「無反省な (unreflective)」ものとして語るオースティンの「意味深長さ (significance)」に注意を促している。[Said 1993: 93=1998: 183]

たとえばレディ・バートラムがウィリアム (ファニーの兄・海軍士官) にインドへ行っ

てほしいと、「やや取り乱していらいらしながら (in a fit of distracted impatience)」[Said 1993: 93=1998: 182] 願うエピソード。「そうすればショールが手に入りますもの。ショールは二枚にしようかしら。」[Austen (1814): II-13 =1978: 263] あるいはサー・トーマスの留守中に事態を紛糾させる仕掛けとして登場するクロフォード兄妹の出自に「ややいかがわしげに滲むフランス色」[Said 1993: 86=1998: 170]。そしてもちろん、ファニーが奴隷貿易についてたずねた時に誰もが「しーんと黙り込んでしまった」あの場面を思い浮かべてもよい。

それらはいずれも「海のむこう」とは違う「ここ (here)」での紛れもなく重要な行動を形作る何かに触れているにもかかわらず、「パートラム家やプライス家の人々が、そしてオースティン自身が認めようとしなければ認めることもできないある種の地位 (status)」を獲得している。だからこそ屈託もなく反省もなく、気楽なのだ。その認めようとしなければ認めることもできないものを「第三世界」と呼んでしまえば、現実の状況を扱うことになるが、しかしその政治的かつ文化的な歴史をすべてくみ取ることにはならない。」[Said 1993: 93=1998: 183]

なぜなら、第三世界は当然のことながら、帝国の内部からはそう呼ぼうとしなければ呼ぶこともできない地位を獲得しているからである。これは階級についてウィリアムズが述べていたのと同じことである。すでに第2節において検討したが、たとえオースティンの社会的描写がいかに複雑であろうとも、イングランドの屋敷の内側から階級を見ることはけっしてできない。その外側を馬で旅していたコベットならともかく。にもかかわらずそれが、階級社会の外部へ連れ出してやれば階級批判になりうるのは、すべて内向的で排他的なものとならざるをえないオースティンの分別=差別が「妥協を許さぬ道徳」として展開するからであった。まさに「定則」とも呼ばれるその確固たる性格ゆえに、道徳は批判に転化しうる。また逆に、階級の外側に立ちえたはずのコベットの階級批判が、「確固として出来上がっている世界への確信」を持ちえなかったがゆえに中途半端なものにとどまったこともすでに見てきた通りである。

したがって、「ジェイン・オースティンと帝国」においてサイドが提案している最も主要な論点は、植民地主義的なオースティンの小説は、徹底して植民地主義的であるからこそ、その外部に連れ出してやりさえすれば、植民地主義批判として読める、ということであることをここで強調しておくべきだろう。オースティン (の植民地主義) をサイドが批判しているというポストコロニアル理論や、それに反発する保守派の解釈にもかかわらず、サイドはオースティンを植民地主義内部からの植民地主義批判として肯定的に高く評価しているのである。

サイドはオースティンの読解に際して二つのことを力説している。一つは、「だから私たちは、『マンスフィールド・パーク』をまちがっても小説と見なし、そこではあさましい現実とのつながりははなからないなどと語ってはならないのだ」ということ。これは保守派的解釈を否定する見解である。もう一つは、「ジェイン・オースティンに対し、奴隷制廃止論者のような情念をもって、あるいは解放された奴隷の立場に立って、奴隷制に接してほしいと期待するのは馬鹿げている」ということ。これはポストコロニアル理論も

陥りがちな、「しばしば従属民族や少数者や権利を持たない者の側から発せられる非難のレトリック」に対する異議の表明である。[Said 1993: 96=1998: 188]

「たしかにオースティンは奴隷所有社会に属していたが、だからといって、彼女の小説を、美的たわごとのあまたある些末な実例として廃棄してしまうのか。いや、そうであってはなるまいと、私は論じたい。」こう述べるサイドは、必要なのは廃棄することではなくて「つながりをつけること」、「相互補完性と相互依存性を見抜くこと」だと指摘する。[Said 1993: 96=1998: 188] すなわち、さりげない言及と意図的な強調を特異な形に組み合わせたオースティンの小説は、大英帝国にとっての植民地の重要性を、そこに想定していると同時に、まさに身をもって体现しているとも考えるべきだ、と。[Said 1993: 89=1998: 176]

こうして、『マンスフィールド・パーク』そのものが、イギリスの海外領土における現実の権力と、イギリス国内のパートラム邸での家庭的紛糾とを結びつけているがゆえに、この小説をしっかりと読むとすれば、私のような読み方をするしかなく、私が見てきたような「姿勢と言及の構造」に触れることしかできないはずだ」とサイドは断言するのだが、そうした彼の読解は、彼ならではの政治的読解と言うべきものであろう。なぜなら、それはここまで検討してきたような形で、“植民地主義の外部に連れ出してやりさえすれば、『マンスフィールド・パーク』は植民地主義批判として読める(読むことしかできなくなる)”という形式をとっているからである。単に読むというだけではその小説を外部に「連れ出す」ことにはならない。その言葉を用いているウィリアムズ自身、階級社会の外に連れ出すことはできても、奴隷制社会の外には連れ出せなかったように。(「レイモンド・ウィリアムズ自身も含む文化批評家たちは、帝国主義との関わりが厳然と存在しているにもかかわらず、それをまったくみていません。」[Said 2001: 151=2007: 281]) ある意味当然のことながら、それゆえ保守的批評家たちがあげつらい、ポストコロニアル理論家たちが「抑圧」という不自然な理屈に頼らねばならなくなってきたように、オースティンとその作品には植民地主義を「認めようとしなければ、認めることもできない」姿勢と言及の構造が成立しているからである。だがサイドはそうしたことを十分に認めた上で、「ジェイン・オースティンの解釈は、解釈する人間、解釈される時、そしてこれらに劣らず重要なのだが、どの場所から解釈されるかによって左右される」と述べる。そしてこう続ける。「もし私たちが、フェミニストたちの仕事をふまえ、また歴史と階級に敏感なウィリアムズのような文化批評家たちの仕事をふまえ、またさらに文化様式に敏感な批評家たちの仕事をふまえて、彼らが提出した問題に敏感に反応するようになれば、次に私たちが進むべきは、世界の地理的分割を中立的ではなく政治的に意味を付加されたものと見なし、そのスケールと大きさに見合う関心と解釈を求めることであろう。」[Said 1993: 93=1998: 182]

すなわちサイドは、オースティンを階級社会の外に「連れ出す」ウィリアムズの手法を、ウィリアムズが連れ出しえなかった植民地主義の外に連れ出すのに用いること、その意味でウィリアムズを植民地主義の状況に「置き直す」ことを提案している。そしてそのためにフェミニストや「文化様式に敏感な批評家たち」、つまり、ポストコロニアル理論家たちの観点をを用いるべきだと提案しているのである。フェミニズムやポストコロニアル理論

の観点にオースティン（やウィリアムズ）は立ちえなかったが、今日の社会を生きるわれわれには立つことができる。そしてオースティンという鋭い観察眼を持った作家は、男性優位社会や植民地主義社会の内部では断固たる道徳の肯定にすぎないが、その外に連れ出してやりさえすれば十分な社会批判になりうるものを書いている。だとすれば、今日の社会を生きるオースティンの読者がなすべきはオースティンを使って植民地主義を批判すること、であろう。植民地主義者であるオースティンを批判することではなく、ましてや植民地主義者であるオースティンを擁護することでもない。

これは、なぜJ.S. ミルなど、偉大な知性が植民地主義をいとも簡単に肯定してしまうのかというサイドにとって大きな問題への解答も与えることになるはずだということも最後に指摘しておきたい。西洋ヒューマンイズムの偉大な伝統がなぜオリエンタリズムや植民地主義とつながってしまうのか。それらへの批判にはなぜつながりえないのか。だがそこに直接書かれていない——だが「暗号化 (encode)」されてはいる [Said 1993: 96=1998: 189] ——ことを読み取ることによって、西洋植民地主義を支えた思想の延長上で、植民地主義の内部からの西洋植民地主義批判が可能となる。すなわち、支配する側からの、支配する側だからこそ理解可能となる形での植民地主義批判の可能性。それゆえ、「この小説は、イギリス国内に広がっている帝国主義文化、これなくしてその後のイギリスによる領土獲得はありえなかっただろうと言えらるほどの帝国主義文化のありかを、目立たなくとも着実に、世に知らしめたのである。」 [Said 1993: 95=1998: 186] サイドの議論が単なるポストコロニアル理論とは一線を画しているのはその点にある。

#### 【文献】

- Austen, J., 1814, *Mansfield Park*. (=1978, 白田明訳『マンズフィールド・パーク』(世界文学全集17巻) 集英社.)
- Bayoumi, M. and Rubin, A. (eds.), 2001, *The Edward Said Reader*, Vintage.
- Boehmer, E., 1995, *Colonial and Postcolonial Literature*, Oxford University Press.
- Gallager, J., 1982, *The Decline, Revival and Fall of the British Empire*, Cambridge University Press.
- Gorra, M., 1993, "Who Paid the Bills at Mansfield Park?," *The New York Times Book Review* (Feb. 28).
- Hobson, J.A., (1902), *Imperialism: A Study*, (rprt. University of Michigan Press, 1972). (=1951, 矢内原忠雄訳『帝国主義論』岩波文庫.)
- Howe, I., 1993, "History and Literature: Edward W. Said's *Culture and Imperialism*," *Dissent* 40 (Fall).
- Leonard, J., 1993, "Novel Colonies", *The Nation* (Mar. 22).
- Loomba, A., 1998, *Colonialism / Postcolonialism*, Routledge. (=2001, 吉原ゆかり訳『ポストコロニアル理論入門』松柏社.)
- Sutherland, J., 1996, *Is Heathcliff a Murderer?: Great Puzzle in Nineteenth-Century Literature*, Oxford University Press. (=1998, 川口喬一訳『ヒースクリフは殺人犯か? ——19世紀小説34の謎』理想社.)
- Said, E.W., 1993, *Culture and Imperialism*, Vintage. (=1998, 大橋洋一訳『文化と帝国主義 I』みすず書房.)
- , 1994, *Representations of the Intellectual*, Vintage. (=1995, 大橋洋一訳『知識人とは何か』平

凡社.)

——, 2001, *Power, Politics, and Culture: Interviews with Edward W. Said*, Pantheon. (=2007, 大橋洋一ほか訳『権力、政治、文化——エドワード・W・サイード発言集成(上)』太田出版.)

高橋和久, 1995, 「誰がアンティグアのことなど気にするものか? などと誰が言った? Said Said What?」, 『現代思想』3月号, 青土社.

Williams, R., (1973), *The Country and the City*, (rprt: Oxford University Press, 1975). (=1985, 山本和平・増本秀男・小川雅魚訳『田舎と都会』晶文社.)

——, (1976), *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society*. (Revised Version: Harper Collins, 1983) (=2002, 椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳『完訳キーワード事典』平凡社.)

